

故山本康正教授を偲ぶ

社会学科主任 川本 勝

山本康正さんが逝った。突然のことでいまだに信じられないでいる。彼がいた研究室のドアには、まだ「山本康正」の名札がそのままになっている。その前を日に何度と通るたびに、研究室の中で黙々とパソコンに向かって文書を作成しているのでは、学生を指導しているのではないか、とふと思うのである。

山本さんは、心優しい人であった。その優しさはいつも相手のことを思い、相手の立場を考えながら人と接する彼の人柄によく現れていた。何か用あって彼が私の研究室にやってくる時には、必ず「ちょっといい」と言って入ってきたものである。私にはその「ちょっといい」という一言が彼の人柄を象徴しているようでならない。そういえば、学科委員会などの会議の席でも「ちょっといい」と言って発言していたのを思い出す。そうして発言する内容は「ちょっといい」どころか、しばしば的をえていて皆を納得させるものがあった。優しさに加えての彼の鋭い洞察力と的確な判断に、学科主任という役職柄のみで議長を務める私はずいぶん助けられたのもである。逝った山本さんにお礼を言うことができないのが悔やまれてならない。

優しさと人の好きという人柄だけではなく、強い意志と才能を持ち合わせていた山本さんを周りがほっぽってはおかなかった。人が好いので頼まれると断ることはしないし、仕事をこなすに十分な才能を持っていたため、次々と仕事を引き受けることになったようである。とりわけ、2年前の阪神淡路大震災後

の山本さんは、数少ない災害社会学者の一人とはいえ、現地調査、テレビへの出演、講演、政府審議会の専門委員、等々に引っぱり出されることになって、その多忙さは尋常ではなかった。彼が携帯電話を持つようになったのもその頃からである。あちこちから連絡を受け、休む暇もなく講義や会議などの合間をぬって飛び回っていた山本さんには、壮烈なものがあつたように思える。今思うに、彼の人柄と才能が災害研究と「壮烈な戦死」をしたのではないか、彼もまた大震災の犠牲者ではないか、と思えてならないのである。

振り返ってみると、山本さんとの出会いは、彼がオハイオ州立大学の Disaster School で Ph. D を取得して帰国した時である。それは、私が駒澤大学に移ることになり、前任校で私の後任にという話がでた時のことである。幸いその大学に職をえることができ、聖跡桜ヶ丘の飲み屋で二人で祝杯をあげたのを思い出す。その後、一緒に飲む機会や、仲間と麻雀を囲む機会、あるいはゴルフを教わる機会もあっていつのまにか親しい友人、俗にいう悪友になってしまった。その悪友とまた縁あって駒澤大学で同僚となったのである。大学改革がいわれるようになり、社会学コースの新カリキュラムをまとめるにあつたて中心的役割を果たしたのも彼であつた。次は、社会学科の改組が課題になっている。それについても彼なりの想いがあつたはずである。大学、学科のことや「河童の会」という数人で行ってきた研究会で社会学のことを議論する時にみせた彼の着眼点のよさにはいつも感心したものである。これから一緒にやらなければならないことがたくさんあつたにもかかわらず、壮烈な戦死をしてしまつて返すがえすも残念至極である。山本さんのあまりにも急逝は、学科にとつても悪友の私にとつても大きな痛手というほかない。

人生のなかばで倒れた彼には、やり残したことが多々あるにちがいない。にもかかわらず、何も語らぬまま帰らぬ永遠に旅立ってしまった。今はただただ彼のご冥福を祈るのみである。忙しく生きた山本さんゆっくりとやすらかに休息ください。